

# 平成29年度 非核平和広島派遣事業

— ( 感 想 文 ) —



愛 西 市

原爆ドーム前



平成29年8月5日（金）～6日（土）

<p>生徒</p>	<p>(佐屋中学校) 中島 瑞基      田中 颯馬      市川 りさ      本田 百李</p> <p>(永和中学校) 高島 大樹      村下 天海      小林 日和      中野 真美</p> <p>(立田中学校) 清水 健太      渡邊 裕斗      岡本 紗希      森 結菜</p> <p>(八開中学校) 佐藤 正基      三輪 拓稔      高木 彩音      渡邊 咲</p> <p>(佐織中学校) 深谷 佳市      森口 健太郎      松本 愛由      大平 愛理</p> <p>(佐織西中学校) 竹内 魁伸      堀田 大熙      後藤 恵      藤原 由衣</p>
<p>引率者</p>	<p>内村 千晴      (佐屋中学校)      若松 孝文      (八開中学校)</p> <p>加藤 正行      (立田中学校)      出馬 栄美      (佐織西中学校)</p>

(敬称略・順不同)

## 非核平和広島派遣で感じたこと

佐屋中学校 中島 瑞基

ぼくは、非核平和広島派遣で、原子爆弾の規模の大きさと恐ろしさを知ることができました。ぼくたちが訪れた平和記念資料館と原爆ドームは、特に原子爆弾の恐ろしさを物語っている物や説明がたくさんありました。原子爆弾の脅威や放射線のこと、放射線によって与えられた影響などを学ぶことができました。

原子爆弾は、原爆ドームのすぐ近くの病院の上空約600mで爆発しました。原爆ドームは、被爆以前は、産業奨励館と呼ばれた建物でした。爆心地付近の建物が一瞬で倒壊したにも関わらず、鉄筋がしっかりしていて作りも頑丈だったこの建物は、爆風が上方からほぼ垂直はたらいしたこともあって奇跡的に残り、原爆ドームと呼ばれるようになったそうです。被爆直後の爆心地付近の写真からは、原子爆弾の破壊力のすごさを感じました。

「ピカッ」と光ったその一瞬に、熱線と爆風が一気に押し寄せ、そのときにいた人は逃げる間もなく、それこそ一瞬で亡くなってしまったのです。即死をまぬがれた人も、約2km未満の場所は火災のため、多くの人が亡くなりました。それだけではなく、原爆の被害はその一瞬では終わりませんでした。大量の放射線は人体の奥深くまで入り、細胞を破壊して、重い病気を引き起こしました。核分裂の開始から炸裂して1分後までに放出された放射線を「初期放射線」といい、爆心地から1km離れていても、死に至る障害を発症するほどの量だったそうです。放射線によって引き起こされた病気は、被爆直後だけでなく、がんや白血病のように何年も経って症状が現れる場合もあるそうです。

ぼくは、原爆を投下することによって、失われた何百万人という多くの命があるという事実から、「核兵器を使ってはいけない」と言うことはもちろん「核兵器を持つことも間違っている」という思いを強くしました。この非核平和広島派遣を通して、原爆の恐ろしさを知り、核兵器を世界からなくさなければならないということを改めて感じることができました。

## これから伝えるべきこと

佐屋中学校 田中 颯馬

一瞬の熱い閃光と爆風により広島町の町が吹き飛びました。人々は、何が起こったか全くわからないまま水を求め川へ逃げて行ったそうです。多くの方が亡くなったなか、やっと一命をとりとめた人たちは、火災の熱のとどかない広い場所を求めて逃げまどいました。戦争が終わってからも原爆は人々を苦しめました。原爆白内障や白血病などが被爆していない人に比べ、何十倍もの割合で発症し、さらに多くの方が亡くなりました。

想像してみてください。何の罪もない人たちが、核兵器を落とされ、全身に火傷を負いながら水や安全な場所を求め彷徨いながら歩く光景を。こんなに苦しくて悲しい出来事を経験した人たちのことを。被爆したのが自分だったらどう思いますか。今、こうして友達と会話して笑い合えることが、誰かとケンカすることがどれだけ幸せなことかを実感できます。

2016年5月27日オバマ元大統領が広島記念公園を訪れ、慰霊碑に献花し平和記念資料館を視察しました。その後、広島への外国人観光客が増え、平和記念資料館へ来場する外国人の割合も増えたそうです。それだけ、平和を願う、求める世界の人々の声が高まっています。

これだけ核を廃棄しようという世論がある中、なぜなくなるのでしょうか。僕たちの訴えが届いていないのでしょうか。それなら僕は訴え続けます。同じ過ちを繰り返さないように。この事業で感じた被爆者の思いを同じ学校の人に、家族に、愛西市の人に伝えることが大切だと思います。僕はこの事業で見たこと、感じたことを忘れずに次の世代へと伝えていきたいと思っています。

## 広島「願い」

佐屋中学校 市川 りさ

1945年8月6日午前8時15分、広島県広島市の上空約580メートルの地点で「エノラ・ゲイ号」と呼ばれた原子爆弾が、大量の熱線と爆風や放射線を放ちながら炸裂しました。爆心地は、現在「原爆ドーム」と呼ばれている「産業奨励館」でした。そこから2キロメートル以内、地域によってはそれ以上の範囲が焼失しました。

今回の非核平和広島派遣事業を通して、核兵器や爆弾が世界にもたらす悲劇を改めて知りました。そして、過去の経験から、私たちを含むすべての人が、平和を願い実現させなければいけないのだと強く思うようになるなど、とても充実した体験をすることができました。

原爆が投下された日から72年が経ちました。広島では、毎年8月6日、平和記念公園にて平和祈念式が開かれます。そこでは、広島市長、県知事、遺族代表や子ども代表などがそれぞれ平和への訴えを述べます。特に私の心に響いたのは、子ども代表の二人が「平和への誓い」の時に語ったこの言葉です。

「平和を考える場所、広島。」

「平和を誓う場所、広島。」

「未来を考えるスタートの場所、広島。」

私は思わず息をのみました。現在小学生である彼らでさえ、被爆当時小学生だった語り部の方々と同じ思いを強く抱いているのです。ならば、私たち日本国民も、もっとしっかりと広島の人々の意思を受け継ぐべきなのではないでしょうか。そして、それを国外に広げていくことができれば、世界が願う平和への第一歩を踏み出すことができるのではないのでしょうか。私は「私にできること」をしたいと思います。それは、この広島での体験を佐屋中学校の人たちに伝えることだけでなく、アメリカの友達にも原爆のことを伝えるということです。こんな小さなことでも、広島にいる人たちへの支えになれば幸いです。

広島の方々のためにも、国民一人一人ができることを、世界へ伝えていく必要があると思います。

## 「私たちの使命」

佐屋中学校 本田 百李

8月6日、午前8時15分「黙とう」。その瞬間、平和記念式典の会場中に鳴り響く鐘が心の中に突き刺さりました。今まで同じ日、同じ時刻に毎年行われてきた慰霊式は、何年たっても消えない悲しみや恐怖に包まれています。今年の慰霊式も被爆者や国民の強い思いがこもった式でした。こうして、あの日の消えてはいけなさまざまな思いが今も受け継がれているのです。

一番心に深く突き刺さったのは、子どもの「平和への誓い」です。あの、小学生の言葉一つ一つが、まるで被害にあった子どもが言っているように聞こえて、日本中、世界中、今は亡き被害者に届くようにと願っているようにも聞こえました。その声は、恐怖を、願いを喜びを、表すと同時に戦争の恐怖や平和のありがたさ、同じ過ちをもう繰り返してはならないという強い思いが詰まっていて、心の奥深くまで響きました。この誓いを聞いて、私ももっと多くの人にこの思いを伝えていきたいと強く感じました。

また、他にも多くの人に戦争の恐ろしさを伝える場所がありました。平和記念資料館です。私が強く印象に残ったものは、被害者の写真です。言葉で表すことができないくらいひどい火傷や傷ついた人の写真でした。爆発の瞬間における爆発点の気圧は数十万気圧に達し、爆風を発生させ、そのエネルギー比は台風の暴風エネルギーの1000倍になるそうです。そして、地表温度は3000～6000℃に達し、人々を死に至らしめました。想像しても分からないくらいの温度に私は恐怖を覚えました。もし、この写真の人が家族だったとしたら・・・と考えると、そう考えただけで涙が出そうになります。しかし、家族が亡くなり自分だけが生き残ったという人がいたというのは紛れもない事実です。その悲しみは想像しても、被害者にしか分からないくらい辛いものだとは私は思います。この思いや事実を知り、次の世代に伝えていくこと。それが、私たちの使命であり、やるべきことであると私は思います。私が学んだことを多くの人に伝えて、少しでも戦争に対する思いが変わる人を増やしていきたいです。そして、世界中から戦争がなくなることを願っています。

「もう2度と核兵器を使用しないで。」

永和中学校 高島 大樹

「もう2度と核兵器を使用しないで。」僕がこの2日間を通して心の底から思ったことです。それまでの僕は、核兵器の恐ろしさを知りながらも、深く考えることはありませんでした。しかし、広島に来て、その気持ちは一変しました。

平和記念資料館では、原子爆弾の構造や、原子爆弾がもたらす被害を学びました。より大きな威力が出せるように工夫されていたことに嫌悪感をいだきました。その工夫をしなければ、犠牲者が減ったかもしれません。そんなに人を痛めつけなければならなかったのでしょうか。考えれば考えるほどに辛くなってきます。

僕が印象に残っているのは、2つあります。1つは、原爆ドームです。原爆ドームからは、原子爆弾がもたらす被害の恐ろしさがまじまじと感じられました。今でも残されている原爆ドームの痛々しい姿は、ぼくたちのような戦争を知らない世代に、原子爆弾の恐ろしさを語りかけているようでした。写真や映像でしか見たことはありませんでしたが、そこにあり続けなければならないものだと感じました。

もう1つは、多くの外国人が広島に来ていたことです。その中には、核保有国の人もいたかもしれません。それでも、同じ過ちを2度と繰り返さないと願う人が外国にもたくさんいました。僕は、広島と長崎を通じて、核兵器の本当の恐ろしさを全世界の人に伝えたいです。同じ願いをもつ人がたくさんいることを願っています。

平和記念式典の1つ1つの内容には様々な人の思いが込められていました。特に、平和への誓いには、これからの社会を担う僕たちの思いが刻まれていました。年月がたち、被爆者が直接体験を語るのは難しくなりつつあります。だからこそ、今を健康に生きることができる僕たちが核の廃絶を訴えていかなければなりません。

## 「僕が見た2つの広島」

永和中学校 村下 天海

原爆ドームを見るのは初めてであった。実際のものすごい迫力だ。ドームの骨格、ひび割れたレンガ、崩れてなくなった壁や窓ガラス。その姿から、戦争の恐ろしさを感じさせられた。

平和記念資料館も初めて訪れた。館内に入ると、空気が変わった。奥に進むと、原爆が投下される前の広島の写真が飾られていた。みんな、笑顔だった。しかし、1985年8月6日、広島は一瞬で地獄と化した。焼けただれた皮膚をぶら下げながら、水を求めてさまい歩く人々。体中に吹き飛んだガラスの破片が刺さり、血まみれで倒れる人々。一瞬で命を絶たれた人々。館内に展示してある写真は、どれも衝撃的であった。気分が悪くなった僕は、正直吐きそうになりながら、館内を回る。

特に印象的であったのは、「伸一くんの三輪車」だ。あの日の早朝、空襲の警報が解除され広島の人々はいつも通りの日常を送るはずだった。そんな広島で三輪車にのって遊んでいたのが伸一くんである。伸一くんは爆心地から500メートル離れたところで遊んでいた。その伸一くんも被爆した。伸一くんは、重傷を負い、8月6日の夜に亡くなった。今でも当時の伸一くんが遊んでいたぼろぼろになってしまった三輪車が展示してある。僕はとてもショックを受けた。「なぜ罪のない人がこんな目に合わなければならないのか。」「戦争がなにかも分からない子どもの命まで、なぜ奪ってしまうのか。」本当につらい。

僕は今回の広島派遣事業で、2つの広島を見た。僕は、この目で、笑顔あふれる町、自然豊かな町を見てきた。見事に復興を遂げた町である。しかし、その過去には、想像を絶する苦しみと悲しみがあり、それを未来のために伝えようとする広島の使命。今まで考えたことのなかった戦争について、じっくり考えてみようと思った。

## 「平和な時代」

永和中学校 小林 日和

私が広島派遣事業を通して感じたことは2つあります。

1つ目は、「生きていることのありがたさ」です。1945年8月6日の朝、広島に暮らしていた人たちは自分たちの身に最大の危険が迫っていることを全く知らないまま、いつものように午前8時15分を迎えました。原爆が落とされた瞬間、地表の温度は3000度を超え、即死したり、体中が焼けただれたりしました。どんなに熱かっただろう。どんなに水がほしかっただろう。被爆した人のことを思うと、悲しくてなりません。

わたしたちが暮らす今と比べてみます。食べ物がある。飲み水がある。住むところがある。着るものがある。健康である。でも、わたしは夏の暑さに文句を言ったり、のどが渴いたとわがまを言ったりしています。そんな自分が恥ずかしくなりました。当たり前だと思っていたすべてのことが、当たり前ではないのだと、学びました。この広島派遣をきっかけにし、すべてのことに感謝していきたいです。

2つ目は、「戦争の無意味さ」です。ほとんどの戦争は、両者の意見が食い違い、相手を負かして自分の都合を通そうとしたがために起こっています。戦争は、国に不名誉と不幸をもたらし、罪なき命を奪います。いいことは何もありません。すべてのことを話し合いで決めていくのはとても難しいことです。ですが、互いが納得するまでゆっくりと話し合う方法を選択してほしいです。この世の中から戦争がなくなることを願っています。

平和記念式典には80以上の国々が参加しました。しかし、地球上には核を所有し、武力で自分たちを守ろうとしている国がたくさんあります。日本のような被爆国が増えてはいけません。日本があの日のお出来事の悲惨さを根気強く伝えていけば、いつか本当に平和な時代がやってくると思います。そんな時代を築くための活動に参加できたことを、本当にうれしく思います。そんな時代になるよう、これからも願い続けます。

## 「平和への道」

永和中学校 中野 真美

辞書で「平和」という言葉を調べてみると、「戦争もなく、世の中が穏やかであること」とあった。今は争いがなく、楽しく暮らすことが当たり前になっている。私たちは戦争がない時代に生まれてとても幸せなのである。

平和記念資料館で、さまざまなことを学んだ。戦争や原爆により、一瞬で多くの命が失われた様子を想像すると、恐ろしい。戦時中の人々は言葉で表せないほど苦しくてつらかったに違いない。もし今、自分が同じような境遇だったら生きる力や希望をもつことができるだろうか。

現代は、人を傷つける言葉がたくさんあり、いじめによる自殺が社会問題になるほどである。私たちは、人が傷つく言葉を口にしたり、命を簡単に捨てたりしていいのか。戦時中の人々がそれを知ったら、絶対に許さないと思う。「そんなことに使うため命をつないできたのではない」と、きつと言われるだろう。どれだけたくさんの人が「生きたい」と願っていたら。それでも、国のためにたくさんの人が亡くなった。家族を残して戦争におもむき、亡くなった。残された家族もたくさんいる。私たちは、そういった人たちがいたことを知る必要がある。その人たちの思いを感じながら、命を大切に、生きていくべきである。

戦争を経験した人々。戦争のことを知らない人々。どちらも、平和を希望していることは同じである。しかし、今の世界は平和ではないと思う。様々な国や地域では、現在も戦争や紛争が起きている。現実から目を背けても、戦争がなくなることはない。大切なのは、一人ひとりが今の世界の現状にしっかりと向き合うことである。また、戦争体験者の方から、話を直接聞くことも大切だと思う。戦争の悲惨さを聞いて、それを多くの人に広げていけば、平和への扉はきっと開く。少しずつでも前に進み、世の中から戦争がなくなる日が来ることを願い続けたい。世界が平和になるまでは決して遠くないと思う。

戦争、二度と起こしてはならない。

立田中学校 清水 健太

僕が広島派遣を通して学んだことはたくさんありますが、特に心に残ったことは平和記念資料館で見た、原爆によって死傷した人たちの資料の数々です。

広島に落とされた原子爆弾は原爆ドームの東南約一五〇メートルの「島病院」玄関から二五メートル地点の上空と言われています。現在も当時と同じ位置に島病院があります。平和記念資料館には、熱線や爆風、放射線といった原子爆弾から生じるものによって被害に遭われた人々の写真やその時の痛みや悲しみが伝わってくる数々の資料がありました。その資料を見た僕は、とても悲しくなりました。心が痛くなりました。このようなことは二度と起こしてはならないと思いました。

千羽鶴の塔や平和祈念式典も心に残っています。千羽鶴の塔は一九五八年五月五日のこの日に除幕されました。二歳で被爆し、中学校一年生のとき、白血病で亡くなった佐々木貞子さんの級友が、「貞子の墓をつくろう」と話し合ったのがきっかけです。被爆後十年も過ぎてから白血病になり、日赤病院に入院していた貞子さんは「鶴を千羽折れば、きっと病気は治る」と信じて鶴を折り始めましたが、その願いは届かず、貞子さんは一九五五年十月二五日、十二歳の生涯を閉じました。千羽鶴の塔には今もなお、平和学習で広島を訪れる学校などからたくさんの千羽鶴が寄せられています。

平和記念式典では、安倍総理などのたくさんの来賓がみえていました。安倍総理は「核兵器のない世界」と「恒久平和の実現」に向けて力を尽くすことを宣言されました。広島派遣に参加して、もう二度と戦争という悲しい出来事を起こしてはならないと改めて思いました。そして、世界平和のために自分に何ができるのか考えていこうと思います。

## 最初で最後の被爆国、日本

立田中学校 渡邊 裕斗

僕は、この広島派遣事業に参加させていただいたことで、戦争の恐ろしさなど、さまざまなことを学ぶことができました。

資料館では、原爆が落ちる前の広島市と、原爆が落とされた後の広島市をシミュレーションを用いた模型で再現してあったり、原爆の熱で溶けたガラス瓶など原爆の恐ろしさを感じさせる展示物があったりしました。原爆の破壊力がいかに大きいものであるかよく分かりました。また、一つ一つに細かい説明があり、当時のことを詳しく知ることができました。

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式では、多くの方々が参列されていました。その中で僕は、たくさんの外国の人たちを見ました。調べてみると、およそ八十か国から代表の方々が、この式に参加するために日本に来られたことが分かりました。僕は、こんなにも多くの国から参加されていることは、とても素晴らしいことだと思うと同時に、自分もその一人であることに誇りを感じました。

世界で唯一の被爆国、日本。その僕たち日本人がこれから平和のためにできることは何でしょうか。僕は、戦争の悲惨さや平和の大切さについて伝えていくことが、世界平和への第一歩だと思います。もし、本当の戦争の恐ろしさを知らない人しかいない世界になったら、再び戦争が起こるかもしれません。しかし、そんな過ちはもう二度としてはいけないと思います。自分も、この体験を通して感じ、学んだことを伝えていきたいと思いました。

最後に、このような貴重な経験をする機会を与えていただいたすべての方々に感謝したいです。ありがとうございました。

## 七十二年前に起こったこと

立田中学校 岡本 紗希

広島派遣に参加させていただき、七十二年前のヒロシマで起こったことに思いを馳せる機会をいただきました。

一日目、貞子さんの像に千羽鶴を奉納しに行きました。奉納する場所には、数えきれないほどたくさん千羽鶴が捧げてありました。折り鶴を何千羽も使って一枚の絵を完成させているものもありました。こんなに多くの方が平和を願いながら鶴を折っているのだなあと思うと心を打たれました。

その後、原爆ドームを見学しました。映像や写真で何度も見たことはありましたが、実物はやはり違いました。八月六日の八時十五分に起きたことをその建物は物語っているようでした。

平和記念資料館では衝撃を受けました。入館してすぐ、八月六日に一体何があったのか、終戦後にはどのようなことがあったのか、資料を見て知ることができました。当時の写真や原爆で亡くなった方の遺品は特に印象深く脳裏に焼き付きました。その人が身に着けられていた服や靴、時計などです。血まみれの服、破れて穴の開いた肌着、八時十五分で時を刻まなくなっている時計。その時起こったことを想像すると、悲惨すぎて言葉がでませんでした。このような遺品は現代の戦争を知らない私たちに二度と繰り返してはならない戦争の恐ろしさを伝えてくれているのだと強く感じました。

二日目の平和記念式典では、平和の誓いや黙とう、ひろしま平和の歌合唱などが行われました。平和の誓いで、小学生代表の竹舂くんが言った、

「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です」という言葉に、とても共感しました。

この二日間で、戦争のことで知らないことはまだまだ山ほどあることに気付くことができました。この貴重な体験を、これから私が伝えていきたいと思います。

忘れない。戦争の惨禍を。

立田中学校 森 結菜

広島派遣事業に参加することで、私はさまざまな貴重な体験をすることができました。第二次世界大戦の終戦から今年で七十二年を迎え、私たちから戦争の記憶は薄れてしまっています。戦争のことを正しく学ぶという意味で、広島派遣に参加することができてとても良かったと思います。

色々な体験をさせて頂きましたが、中でも最も心に残ったのは千羽鶴の奉納でした。自分たちの奉納した折り鶴の数もさることながら、既にケースに納められている鶴の多さに驚きました。それは、人々が捧げた平和への祈りの数なのだと思います。

また、原爆ドームや平和記念資料館の見学、平和記念式典への参加も強く印象に残りました。原爆ドームや平和記念資料館では、原子爆弾の威力や被害の非人道さを感じました。そして平和記念式典では、平和の大切さと戦争のむごさを再確認することができたと思います。

私たちは平和に慣れすぎていて、平和であるということであらためて意識することは少ないです。平和が長く続くのは良いことです。でも、それにかまけて平和であることへのありがたみを忘れてはいけません。戦争の惨禍を忘れて再び戦争を引き起こすことのないよう、戦争について学習することはとても大事だと思います。

原子爆弾は、人に対して決して使用してはいけない兵器です。その後遺症で今も苦しんでいる人たちはたくさんいます。私たちは、非核・平和宣言都市の市民として、世界から核兵器がなくなる日まで、核の恐ろしさを訴えていかなければなりません。そのためには、戦争について正しく学んでいく必要があります。長崎に落とされた原子爆弾が、地球で使われた最後の原子爆弾であることを願わずにはいられません。

## 原爆から学んだこと

八開中学校 佐藤 正基

僕は、広島へ行くのは二度目だったけれど、やはり核兵器というものは恐ろしいと思いました。その中でも、記憶に残っているのは、広島平和記念資料館と平和記念式典です。

平和記念資料館は、東館だけしか見ることができなかったけれど、とても勉強になりました。東館だけでも、数多くの展示品や説明がありました。特に印象的だったのは、一階の展示でした。中学生の遺品や三輪車など、子どもまで被害にあったと思うと、とても心が痛みました。その展示の中に、焦土に咲いたカンナの花の写真がありました。広島は、百年は草木が生えないと言われていたそうです。それでも、焦土にカンナの花が咲いたというのは、希望になったと思います。

平和記念式典は、とても多くの人に来ていて、広島のために、あそこまで多くの人に来ているのは、今でも原爆に苦しんでいる被爆者への励みになったのではないかと思います。また、広島市長の言っていたように、日本は唯一の被爆国として、核兵器禁止条約の締結促進を目指して、核保有国と非核保有国との橋渡しに本気で取り組んでいかなければならないと思いました。

広島や長崎に原爆を落とされ、多くの被害者のためにも、世界から核兵器を廃絶しなければならぬと思いました。

## 広島派遣を通して

八開中学校 三輪 拓稔

平和という言葉には、戦争や内戦で社会が乱れていない状態という意味があります。私はこの平和の大切さを、今回の広島派遣でよく学ぶことができました。平和記念資料館にある資料を見たときに、特に痛感しました。そこにあった多数の資料一つ一つが、自分の思っていた戦争というものはるかに上回る残酷さをもっていたからです。皮膚が溶けながらも助けを求める人々と聞いても、よく分からなかった悲惨さが、写真として見ると恐ろしいまでに理解できました。

原爆という極めて非人道的兵器を、平和記念式典では絶対悪と表現していました。まさにその通りであると思います。恐ろしいのはその無慈悲さです。そのときを生きている人だけでなく、次世代にまでその爪あとを残し、多くの人から可能性を奪う、決して許すことができないものです。戦争は平和とは対極の存在です。戦争を象徴する原爆を世界から消滅させることが、平和への大きな一歩であるということをよく理解できました。

しかし、私たちがいきなり核兵器をなくそうとしても、それは限りなく難しいです。ここで私たちが積極的に行うべきことは、小さな平和作りであると考えます。戦争も、いきなりは始まりません。小さな争いが大きく発展して内戦・戦争へとなっていくのです。少しずつ争いをなくしていけば、小さな歩みでも歩みを止めなければ、いずれ平和は訪れます。

平和という言葉は戦争により生まれました。戦争という無意味で無慈悲な行為の恐ろしさを、今回の広島派遣で訪れた各地で学びました。それを多くの人に伝えていき、平和を守っていく責任が私たちにあると感じました。当たり前だと思っている日常が当たり前でないことを知りました。世界が平和になるように努力することを諦めてはならないので、自分もできることを全力で行っていきたいです。

## 「ノート」

八開中学校 高木 彩音

私たちが、毎日普通に暮らしていることこそが平和。ということを広島派遣が私に教えてくれました。私たちの日常こそが平和なのです。でも私たちは、当たり前すぎて、これが平和だとは、気づいていません。私も、そのうちの一人でした。

広島派遣に行った中で、とても印象的だったのは、平和記念資料館にあった、見学した人が感想などを書けるノートです。私は、そのノートに何が書いてあるのか見てみました。そのノートには、小さな子の文字や、色々な国の文字が書いてありました。「世界に平和がおとすれますように。」「世界が笑顔であふれますように。」きっと小さな子が書いたのでしょう。覚えてたの文字で「へいわ」と平仮名で書いてあったのもありました。また、英語の単語の「p e a c e」と書かれていたのも見ました。世界中の国々が核兵器を唯一使われた国、日本に目を向けていて、どの国の人々も平和を望んでいることを知って、とても嬉しかったです。

私たちが今、こうして何も不自由なく過ごしていることは、とても幸せなことです。みんなに気づいてほしいです。でも、みんなが広島へ行くのは、難しいと思います。ですから、被爆者の平均年齢が八十二歳を超えた今、私たちが次の語り部として、動くべきではないでしょうか。原爆投下という誤ちを二度と繰り返さないように、遠い記憶とならないように。

この作文を読んでもくれた人たちが、これをきっかけに「平和」について考えてくれると嬉しいです。

## 原爆の恐ろしさ

八開中学校 渡邊 咲

私は今回の広島派遣事業を通し、教科書では学べないようなことをたくさん学びました。それは、原爆の恐ろしさはもちろん、その後に残る後遺症によって亡くなった方や、今でも後遺症によって苦しい生活を送っている人がたくさんいるということを知りました。また、そういった資料ではなく、原爆ドームからも、その悲惨さが伝わってきました。なぜなら、原爆ドームは当時のままで、そこだけ時間が止まっていると私は感じました。資料館で、原爆が落とされる前の原爆ドームは、とてもきれいで、そんな建物が一瞬にして、ボロボロになってしまうほどの危険な核爆弾を作ることはもちろん、この先いかなる場合でも、絶対に核を使ってはいけないと強くそう思いました。平和記念式典では、ニュースで見たときには分からなかった事がたくさんありました。中でも印象に残っていることがあります。それは、外国の人たちがとても多いことです。これは実際に行かなければ分からないことでした。私はそのことに気がつき、外国の人たちにも、原爆の恐ろしさが伝わっていることがとてもうれしかったです。

日本は唯一の被爆国ですが、実際に戦争を体験した人や、原爆に被爆した人がだんだんと少なくなっています。私の曾祖母は、戦争を体験しており、私が小さい時から、戦争中の暮らしについて教えてくれていました。しかし、その曾祖母が亡くなったことにより、本当に戦争体験が減っているのだと実感しました。今ある平和は、先人たちがつらい思いを乗り越えて実現させた努力の結晶であり、このときを生きる私たちにとっての使命は、この平和を守り、子孫へこの平和をつなげていくことだと思います。そのためには、しっかりと戦争がいかに悲惨かを、後世へと伝えていくことが大切ではないかと、私は考えます。

## 広島派遣事業を終えて

佐織中学校 深谷 佳市

僕が二日間の広島派遣事業を通して学んだことは、二つあります。一つ目は命の尊さ、大切さについて。二つ目は戦争の悲惨さについてです。

僕たちは二日間で、平和記念公園、原爆ドームと、平和記念資料館を回り、広島市原爆死没者慰霊式、平和祈念式に参加させていただきました。

平和記念公園では、愛西市で集めた千羽鶴を奉納しました。千羽鶴は、愛西市で集まったものだけでも、すごくたくさんありましたが、すでに奉納されていた折り鶴の数はそれをはるかに上回っていて、驚きました。今までに広島に集まっている折り鶴の数は、百トンを超えているそうです。それだけ多くの人が平和を望んでいるのだと思うと、胸がいっぱいになりました。

原爆ドームは、一言で表すと「異次元」でした。外見は当時のそのまま残っていて、周辺の地域は整備が進む中、建物の周りだけ時間が止まっているようでした。建物は、威圧感や圧迫感があり、原爆の恐ろしさがそのまま伝わってきました。

平和記念資料館では、被爆当時、中学生が着ていた服や、爆風でこわれた三輪車など、戦争に関する資料が展示されていました。そこでは資料を通して、改めて戦争の恐ろしさ、被害の大きさ、亡くなった人の多さを知りました。二度とこんなことが起きてほしくないし、絶対に起こしてはいけないと思いました。

記念式典は、厳かな雰囲気の中進行していました。全国、全世界から訪れた人達が、平和を祈っていました。

二日間を通して、平和のありがたみ、安心して暮らせる世界の素晴らしさを再確認し、そんな世界に感謝しながら、今この時をしっかりと生きていこうと思いました。

## 終わらない戦争

佐織中学校 森口 健太郎

皆さんは、「広島」と聞いて何を思い浮かべますか。色々な物を思い浮かべるでしょう。その中には、当然「原爆」といったことも入ると思います。でも多くの方はこう考えているのではないのでしょうか。「あれは七十年も前の出来事だ。」と。しかし、実際に広島に行ってみると、それが間違いであることに気付かされました。

僕達は初日、平和記念公園の平和記念資料館を訪れました。残念ながら本館を訪れることはできませんでしたが、別館に入ることができました。投下される前の広島、八月六日の広島、その後の広島、本来ひと続きになるはずだった町の風景を見ることができました。その中で一番頭に残っているのは、戦後の広島です。なくなならない差別、止まらない核開発、そして、生涯にわたって苦しめられる後遺症、焦土からの再生。長きにわたって被爆した人達が苦しんできたことがわかりました。

二日目には平和記念式典に参列しました。

そこでは、多くの人々が献花をして平和を祈っていました。何万という人が、非常に厳かな雰囲気の中、八時十五分、黙祷をささげました。続いて、広島市長による平和宣言がありました。ここでは、核兵器禁止条約の締結を強く求めています。この式典は、七十年余り続けられています。そして、この先もずっと続くことになるでしょう。

僕は、この二つの経験から「広島は七十年前で終わったわけではない。」そう思いました。七十年前から今日、さらにその先と続いていくものなのです。平和というものはい体どんなものなのでしょう。少なくとも核兵器がなくなるまでは平和ではないと思います。僕たちが今後すべきこと、それは、核兵器をゼロにすること。世の中を平和にすること。平和活動が実を結ぶことを願います。

## 平和への願い

佐織中学校 松本 愛由

八月六日、私は「平和祈念式」に参列していました。七十二年前のこの日、広島は一発の原子爆弾により焼け野原となってしまいました。そして、原爆は多くの大切な命を奪い、今もなお、多くの人々を苦しめているのです。

私が「平和祈念式」で一番印象的だったのは、外国人の参列者を多く見かけたことでした。最初は驚きましたが、考えてみると核兵器の問題は、国内だけの問題ではなく、世界全体における問題であるということを、改めて感じました。そして、核兵器のない世界は様々な年代、人種の人と創りあげていくのだと思いました。

戦争は、町や命だけでなく、人々の夢や希望、明るい未来など、すべてを一瞬にして奪って行ってしまいます。これは、とても恐ろしいことです。このような過ちを二度と犯さないためにも、戦争について伝えていかなければならないと思います。広島で見たことや聞いたことは、想像以上のものでした。原爆は、人々のささやかな幸せや当たり前の生活など、なによりも大切な物を奪って行ってしまいます。そんな原爆や、核兵器は、この世界に必要なものだと私は思います。

今、好きな物を食べ、好きな物を着て、好きな場所に、好きなときに自由に出かけることができます。それは、日本が平和であるという証拠だと思います。私たちが当たり前だと思っていることを、当たり前と思わず、何事にも感謝をする気持ちをもつことを、大切にしないとはいけません。そしていつかこの世界から核兵器がなくなり、世界中の人々が心の底から笑い合うことのできる日が来ることを、私は願っています。そのためにも、現地で学んだことを少しずつ周りに伝えていきたいです。

## 原爆の恐ろしさー広島に行ってー

佐織中学校 大平 愛理

今から約七十年前、広島に原爆が落とされました。その当時のまま残っている原爆ドームを見せていただくなどの貴重な体験ができる広島派遣事業に参加させていただきました。

広島に着いて昼食を食べてから、平和記念公園に行きました。そこで千羽鶴を奉納しました。そこには多くの千羽鶴が奉納されており、こんなにも多くの人々が平和を願っているんだと感じました。そして、原爆ドームの近くまで行くと、そのドームの周りの空間だけが時間が止まっているようでした。このドームをこれだけボロボロにさせるぐらいの力がある爆弾の熱線を浴びた人たちは、どれだけの熱い思いをして亡くなったのだろうと思いました。原爆で亡くなった人も、もちろん苦しかっただろうけど、今生きている被爆者の人たちは、死ぬまで苦しまなければならぬのかと思うと、本当に悲しい気持ちになりました。国のために、と誰もが我慢していたあの時代に生きていた人たちがすごくかわいそうに思いました。平和祈念資料館には、たくさんの原爆に関する資料があったり、映像が流れていたりしました。

二日目は、朝早くから平和記念公園に行き、式典に参加しました。その日は朝からすごく暑くて、式典が行われている間じゅう、ずっと汗が止まりませんでした。「この暑い中、熱い光線を浴びて本当に苦しかっただろうな。たくさんの命が犠牲になった原爆は、これから先の未来も、落としたり作ったりしてはいけない。」と思いました。

この広島派遣事業で学んだことは、核のない世界を作ることが、平和への第一歩だということです。今、国際関係が問題になっており、広島のをミサイルが飛ぶ可能性もあります。もしも日本に落ちてしまったらどうなるでしょう。過去の過ちを繰り返さないよう、世界中に広島のことを知ってほしいです。

## 「広島派遣を終えて」

佐織西中学校 竹内 魁伸

この広島派遣の中で、僕の心が動かされた瞬間が二回ありました。平和記念資料館の見学の時と、平和記念式典の時のことでも代表の言葉を聞いた時です。平和祈念資料館ではテレビで扱うことができない生々しい姿。原爆に関する病気で体がボロボロになった人の写真が展示されていました。

過去にテレビのドキュメンタリー番組などで原爆の恐ろしさ、規模の大きさは知っていましたが、今回の見学を通して原爆、すなわち「核」につちえの考え方を改めて考えさせられたとても希望な経験でした。そして、絶対に無駄にできない時間を過ごせました。

平和祈念式典での子ども代表の子が話した言葉。

「未来の子どもには、戦争の体験は不要です。しかし、戦争の知識を正しく学ぶことは必要です。」

という言葉に深く共感しました。今、戦争体験者の高齢化が問題になっています。もし、このまま何もしなかったら、絶対に戦争についての記憶は消え去ります。決して起こってはいけないことです。「語り継ぐ」若い世代の人々の「使命」だと僕は思っています。

そして、西中のみんなに伝えたいことです。「戦争についてどう思いますか？」と尋ねられて、「絶対ダメ。」とか「二度としてはいけない。」などと単純にこたえるのはやめてください。そんなのは、誰でもわかる当たり前の事です。その考えから一歩踏み込んでみてください。戦争に対してまた違った見方ができるはずだし、平和への思いや価値観、考え方なども変わってくるはずだから……。

最後に、この非核広島派遣事業に携われた全ての方々にお礼を申し上げます。このような貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

「広島の実現と後世のために」

佐織西中学校 堀田 大熙

一九四五年八月六日午前十一時二分、ある物体が広島市に落とされた。やがてその物体は空中で炸裂し、無数の命を奪い、七十二年が過ぎた今でも、数多くの被害を残している。そう、その物体とは、原子爆弾である。

僕は今まで、原爆についてある程度の知識はあったものの、広島に落とされた後の被害などについてあまり知らなかった。だから、広島派遣に参加することで、自分の知識を高め、一人でも多くの人にこの現状を知ってもらおうと決意した。

ある程度のことには知っている。そう考えていたのだが、いざ広島へ行くと、様々な原爆の爪跡に時々言葉を失った。今にも崩れそうになりながらも、形を崩さない原爆ドーム。被爆当時の広島市の様子や無念にも亡くなられた方々の遺留品、納められた生々しい被爆者の写真などを展示していた広島平和記念資料館。そして、市内各地で行われる平和活動や国の政策に反対し、デモを起こす人々。これら三つから、過去の悲劇は消せないが、その悲劇は後世に伝えることが重要であり、何年先でも記憶を風化させないが重要だと学んだ。同じ過ちは二度と繰り返さない。その強い意識が大切なかもしれない。

僕はこの体験を通じ、一人でも多くの人に広島の実現を知ってもらおうと改めて決心しました。今の世界は、一歩間違えると核の使われる第三次世界大戦が起こる可能性がある。そうならないためには、より多くの人に広島の実現を知ってもらい、核廃絶の世論を高めていくことが必要だと思う。そして、核なき世界が到来することを、心から望んでいる。

## 「戦争という存在」

佐織西中学校 後藤 恵

今を生きる私たちにとって、戦争というものがどこか遠い存在になってしまっただけではいませんか。戦争を経験していない私たちは、実際に全てが失われた瞬間を見ていません。

しかし、戦争が残した傷あとを見ることはできます。当時の人々が二度と過ちを繰り返さぬよう、私たちに伝えるために残してくれたものです。広島を訪れて実物を見ることで、しっかりとその思いを受け取りました。

今回、初めて広島に足を踏み入れて感じたことがあります。私は今までテレビや新聞で、戦争が残した傷あとについて見てきました。でも、実物は違います。広島では、原爆ドームや資料館で本物の傷あとを目にできます。今まで自分が感じていたものとの違いを肌で感じることができました。

私たちには、「実物を見る」という機会があまりなく、なかなか間近に感じることはできません。だからといって、戦争を遠い存在のように感じてほしくありません。戦争を経験していないからこそ、私たちは「より知ろう」という気持ちになるべきなのです。そうすることで、戦争の記録を残し、今に伝えてくれた人々の「二度と過ちを繰り返さないで」という思いを受け取ることができるはずです。決して戦争を起こさないという誓いが当時の人々の思いに応えること、つまり永久平和の約束を守ることにつながると思います。

広島では今、悲劇の瞬間を目撃した人々、「戦争経験者」の高齢化が問題になっているそうです。実際に経験をした人が減り、語り継ぐことが難しくなってきた今、戦争を経験していない私たちに何ができるのでしょうか。私は、「実物を見る」という経験を通して、戦争の悲惨さや平和の尊さを再確認することができると思いました。そして、今を生きる私たちにとって、平和を考える第一歩になる大切なことだと考えます。広島を訪れ、実物を見て、被害の大きさを知る。これは、私たちと同世代の人にも広げていくべきだと思います。

七十二年前の当時を生きただけの人々と同じ日本人として、あの悲劇を二度と繰り返さない強い決意を、今、ここにします。

## 「非核広島派遣事業に参加して」

佐織西中学校 藤原 由衣

私はこの非核広島派遣事業に佐織西中学校の代表として参加できたことを、とても光栄に思います。ありがとうございました。

私が特に印象に残っているのは、平和祈念資料館を訪れたことです。そこには、八時十五分で止まっていた腕時計や、焼け焦げた学生服、皮膚がただれてしまって全身にやけどを負った姿の写真は、非常に恐ろしいものでした。いつも賑やかな私でさえ、言葉を失ってしまう。そのような展示資料が数多くありました。

また、平和記念公園では、折り鶴を奉納しました。そこには、私たちが奉納するには、難しいほどの数の折鶴が奉納されていました。そして、外国の方も多くみられました。こんなにも国籍を問わず、多くの人が平和を望んでいることを改めて感じることができました。

平和記念公園の中を歩いていると、いつもテレビで見る原爆ドームが見えてきました。それは、緑あふれる自然豊かな街には、全く似合わない建物でした。初めて見る原爆ドームは、私に核兵器を使用することの恐ろしさを訴えかけているように思いました。

最近、北朝鮮が日本の排他的経済水域に弾道ミサイルを落とすというニュースを耳にしました。また、グアムにも攻撃をするかもしれないという話も聞きました。他にも核を所持している国はたくさんあります。そして、日本は世界で唯一の被爆国です。被爆国だからこそ、核兵器の恐ろしさをしっかりと後世や、世界中に語り継がなくてはならない「使命」ではないかと私は思います。

今回、このような原爆について深く考える出来事になったこの事業に参加させて頂くことができ、本当に嬉しかったです。

